

独唱基礎 I

音楽教育講座・木村 勢津

1 授業の概要

平成 22 年度後学期の「声楽①」は、音楽文化コースの 1 年生を対象に「独唱基礎 I」と題して開講された。

1) 授業の目的

本授業は、ベル・カント唱法の基本的概念を学び、声と言葉と音楽の関係について考究し、歌唱実践を通して、その基礎的技術の習得を目的とした。

2) 授業の到達目標

授業の到達目標を下記の 3 点に置いた。

- (1)ベル・カント歌唱法を正しく理解し、その基本概念を説明できる。
- (2)イタリア古典歌曲を正しい発音で朗読することができる。
- (3)歌唱曲について、その曲の背景や歌詞の意味を十分に理解し、楽曲に適した歌唱が行える。

3) 授業の詳細

授業は、その基本を個別指導に置き、個別指導を聴講する学生のディスカッションを取り入れて展開した。

本授業は、昨年度まで毎回、授業時間に受講生全員の個別指導を行っていたが、本年度は、学生の理解を得て、毎回の授業では 3 名の個別指導を基本とすることとした。授業者は、個別指導の際、受講者の発声や歌唱の目標を明示し、指導のポイントを説明するように努めた、受講生間で発声や歌唱の変化について、感想を述べあったり、受講生間のディスカッションの時間を設定したり、個別指導を受けない授業日であっても、授業に積極的に参加し、ベル・カント唱法への理解を深められるよう心がけた。また、第 1 曲目の楽曲は、受講者全員が同じ楽曲を学習することとし、イタリア歌曲を初めて学習する受講者にも学習方法が解りやすく、また受講者間で確かめ合いながら学習できるよう、改善して授業を

展開した。さらにまた、受講カードに記された受講者の熟達度に関するコメントは、全ての受講生の了解を得て、本人に開示し、学習意欲の向上に努めるようにした。

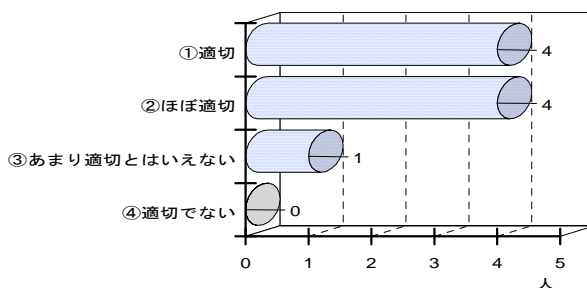
2 授業評価方法

授業評価は、授業最終日に、無記名アンケートを実施し、全受講生 9 名から回答を得た。アンケートは、19 項目について、3 もしくは 4 つの選択肢から選択する方法と記述式の併用で実施した。

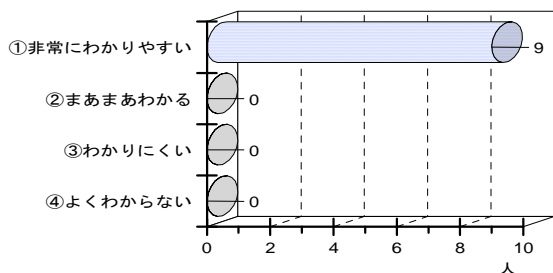
3 授業評価結果

1) 授業全般に関して

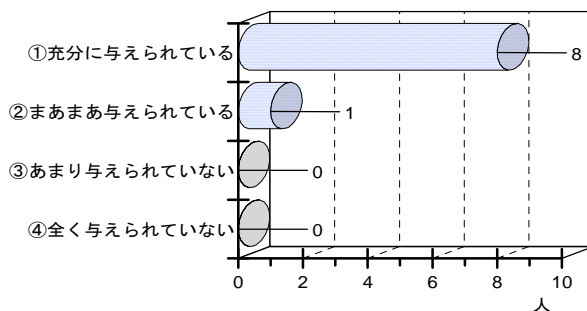
(1) 授業の進度



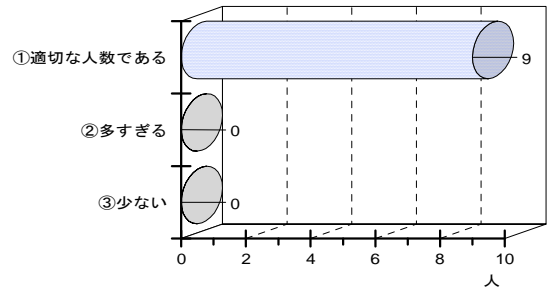
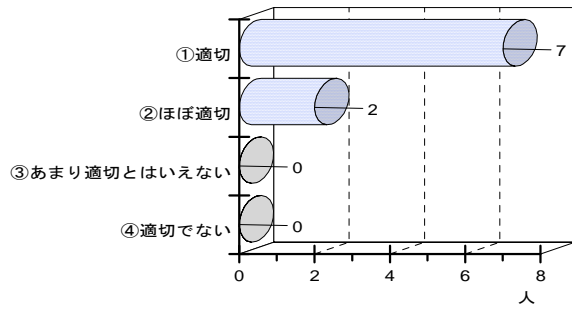
(2) 担当教員の話し方や説明について



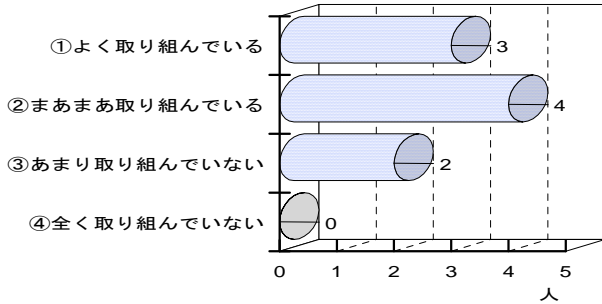
(3) 意見発表や質問の機会



(4) 授業の内容・レベルの適切度

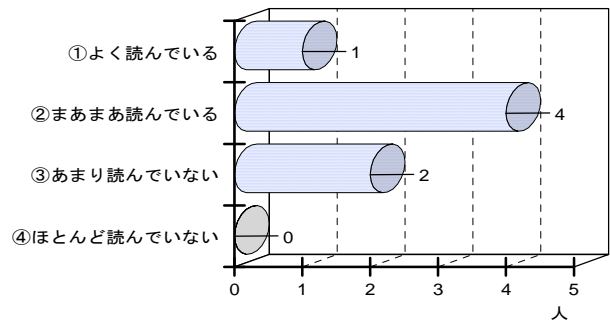


(5) 授業時間外の積極的学習に関する意識



3) 学習内容に関して

(9) イタリア語の発音練習を授業外学習



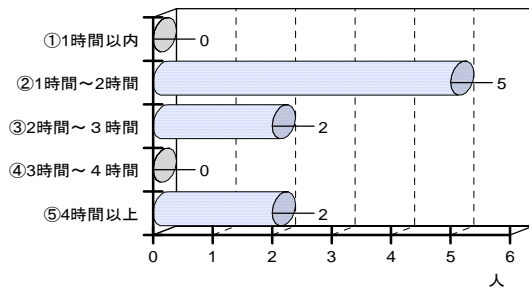
(積極的に取り組めなかった理由)

- つい専攻楽器を優先してしまう。
- 学期前半に比べて、後半は体調悪化や時間の余裕がなかった。

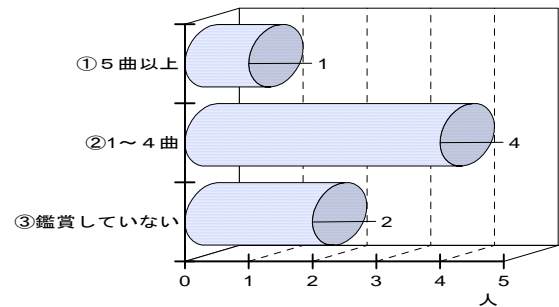
(授業外学習が行えなかった理由)

この授業意外の授業準備で練習時間を確保できなかった。(2名)

(6) 1週間の平均授業準備時間

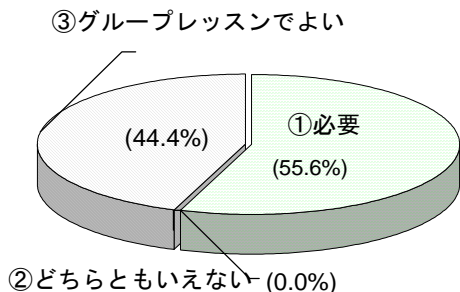


(10) 自分が課題とした楽曲以外の鑑賞



2) 個別指導に関して

(7) 個別指導の有用性



(11) 手稿譜を現代譜へ書き換えたことによって学んだことについて (自由記述)

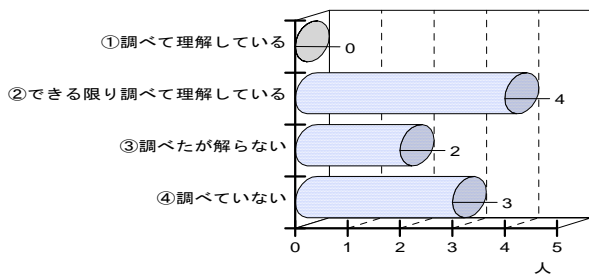
- 旋律の流れなど、見るだけでは気づかないことに気づけた。
- 現代譜の楽曲を当たり前だと思っていたので、違いが明確にわかって良かった。
- 印刷機がない時代の楽曲の伝え方を知って、必ずしも皆が皆、原曲通りに至っていないということを知った。
- 言葉毎に書かれていることがわかった。
- 楽譜の歴史の一端に触れられた。

(8) 個別指導を受ける人数と時間

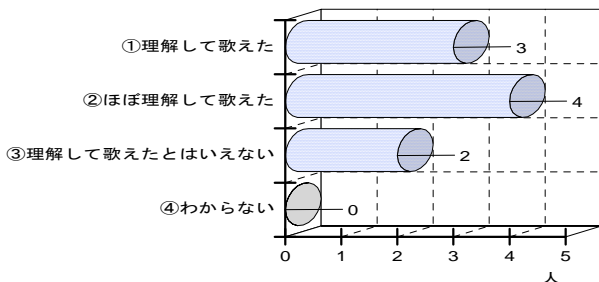
個別指導の時間に関しては、9名中3名より回答があり、全員30分が適当と回答があった。さにより異なったが、平均25。

4) 学習成果に関して

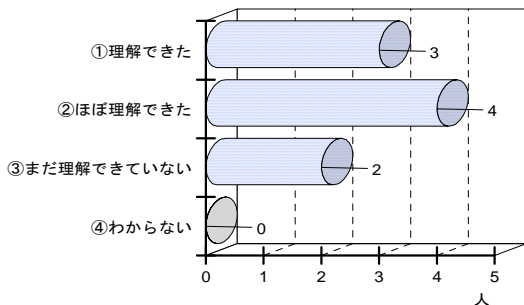
(12) 試験で歌唱した曲の作曲家について楽曲の背景、出典されたオペラの調べ学習



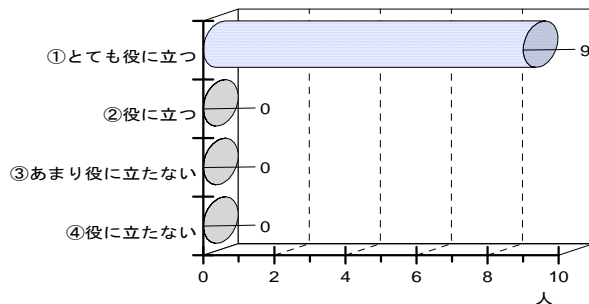
(13) 試験で歌唱した曲の歌詞の意味を理して歌えましたか。



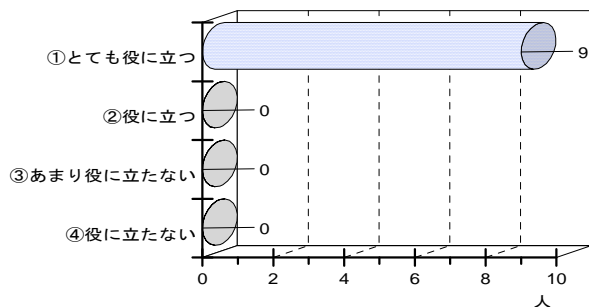
(14) ベル/カント唱法の理解度



(15) 教育実習や教育現場の有用性



(16) 音楽活動や生涯教育の指導者の有用性



5) その他

(17) 1年次に学んでおいた方が良くと思われる声楽分野の内容(自由記述)

紙面の都合上、同類はまとめて表記した。

○発声の基礎 (4名)

○歌は言葉を伝えることができるのでそれを楽しむ。

○個人個人の歌唱における問題点

○うたで表現することの意義

(18) 授業で良かったこと・改善点

○良い点と改善点, 課題を明確にして授業を行ったこと。大変意義のあるレッスンだと思います。時間配分の改善を。

○自分以外のレッスンでも参加していける点は良い。

○一人一人に対して課題を提案してくれたので、改善に向けて頑張れた。

○丁寧なレッスンでとてもわかりやすかった。他の人の変化も見られるのが良かった。

○一人のレッスン時間、(昨年度より)長かったこと。

○その人にあった指導をしているのを見て、声が変わっていくのを自分で感じることができる。

○友達の変化をみることができたのが良かった。

○歌とピアノは通じるものがあり、歌を勉強して学んだことをピアノに活かすことができた。

○自分以外のレッスンでも参加している。

4 結果の分析と今後の課題

受講生は、昨年と同じ9名であった。

1) 授業全般に関して

授業の進度に関しては、ほぼ全員の受講生が適切と感じている。適切と感じていない受講生は、授業の準備のために5時間以上を費やし、鑑賞学習も充分に行っている。十分な準備をしているにも関わらず、進度が遅いと感じているものと推測できる。授業のレベルや内容に関してはほぼ適切と感じているが、授業時間以外の学習については、積極的に取り組んでいないと感じている学生がいる。その理由として、自分の専門分野の学習に時間が割かれることが上げられている。履修科目の多い1年生にとって、実技系の授業準備に時間を費やし無ければならないことは分かっているが、時間が取れない現実もあるようである。1週間の平均授業準備時間は、90分と回答した学生が一番多く、半数を占めた。4時間以

上と回答した2名の学生は、いずれも5時間と回答している。

2) 個別指導に関して

昨年度は、毎回個別指導を行ったため、一人当たり平均8分程度の指導であった。今年度は、昨年を受講生からの改善点として挙げられた個別指導の充実を実施するために、3週間に1回の個別指導となるが、20～30分の指導時間を確保し、各回授業の改善点の明示や指導の内容の概説を試み、受講生間のディスカッション等も組み込んだ。しかし、アンケート結果からは、グループレッスンでよいとの回答が44%であった。1週間当たりの学習時間との関係から、声楽を卒業研究に選択しようとする受講生や、事前準備に時間をかける受講生は、個別指導を望む傾向にあった。

受講生間のコメントやビデオの活用は、各自が客観的に自分の問題点や成長を把握するのに有用であり、また、自分以外の受講生の成長については、客観的に把握でき、指導の要点を把握するのに有益であった。

3) 学習内容に関して

授業外のイタリア語の発音練習を行っていない受講生はいないものの、全員が十分に練習を行っているとは言えない。作曲家や作品に関しての興味関心も「調べていない」もしくは「調べたがわからない」の回答が半数を超えている。さらに、試験の歌唱曲については、歌詞を熟知して歌唱できていないと自らが認知する受講生がいる。授業目標を十分に達成したとは言い難い。ベルカント歌唱の理論については、全員の受講生が、理解できたと回答している。

第2回目の授業において、具体的事例を挙げてイタリア語の読みの練習方法、楽曲の調べ方等を詳細に講義し、また楽曲のイタリア語読みに関しては、受講生全員に個別指導を行ったが、自主学習の方法についての指導をさらに明確に提示することが今後の課題として挙げられる。楽曲に関しては、歌詞の意味を始め、受講者自らが調べたことを自分の言葉で表現させる等、授業の工夫が必要である。

学習意欲や事前自主学習の格差は、受講生が得意とする分野を中心に学習準備を行う傾向がある実技系の学生にとって、起こりうることではあるが、より意欲的に楽曲

に取り組み、声を用いて表現できることの意義を体感できるよう、授業の工夫を行いたい。

今年度の受講生9人は、現時点において全員が教員免許の取得を目指している。学校教育現場で、声楽は音楽教育の根幹をなす重要な分野である。一人一人がそのことを自覚し、自らが歌うことの楽しさを感じ、また確かな指導法を取得するために、理論と実践の両面から学びを深めることができるよう、導入となるこの授業とこの授業の展開である「声楽②」の繋がりについてもさらに充実を計りたい。